

は〈文〉同様「建築要素」が多くみられたが、「要素なし」も多くみられた〈文〉とは異なり、全体の分布が「建築要素」に集中していた。ここから彫刻は、施される建築と一体で装飾として捉えられていることが窺える。〈色〉では相対的に「付加要素」や「要素なし」が多くみられた。ここから、建築が否かに関わらず、色彩表現は一般的に装飾として捉えられていることが窺われる。〈なし〉では「付加要素」が大半を占めており、ここから家具や絵画などの建築要素以外のものは、その存在自体が建築における装飾的なものとみなされ得ることがわかる。

3. 装飾の認識

3-1. 装飾の象徴作用と性質 資料とした論説からは、「なおも装飾を眺め続ける時に、我々の意識が進んでいくのは、装飾の図柄、表象が示すイメージにもとづく、想像の領域である。」のように、建築家が装飾のどのような側面に着目しているかを読み取ることができる。そこでこれを装飾の認識として抽出し、その意味を比較検討した(図3)。その結果、その大部分は装飾の象徴作用についての認識であり、「機能的、力学的な合理性に

そぐわない」といった装飾の性質についての認識もわずかながらみられた。

さらに象徴作用についての認識を、「人間」、「社会」、「美・芸術」、「建築」、「形態言語」のまとまりで捉えた。

【人間】は、装飾を人間精神の象徴として認識するもので、人間の心の豊かさや欲望の表出として捉えるものがみられた。「人の願いや思想の現れ」は、民族や宗教が持つ思想の象徴といった意味合いも含むことから、【社会】との関連を持つ。「人の時間・技術の結晶」は、人間の情念が込められた点に価値を置くものであり、【美・芸術】との関連を持つ。

【社会】は、装飾を人間社会の構造や環境の象徴として認識するもので、伝統・文化・民族や、西欧といった社会全体を表すもの、社会の動態に影響を受けざるを得ないものとして捉えるものがみられた。

【美・芸術】は、装飾を美や芸術の象徴として認識するもので、「質の悪さを包み隠す」といった美の持つ異なる側面や、建築に芸術性を付与する事で、単純な建物ではない「建築」を成立させるといった「高位の建築」

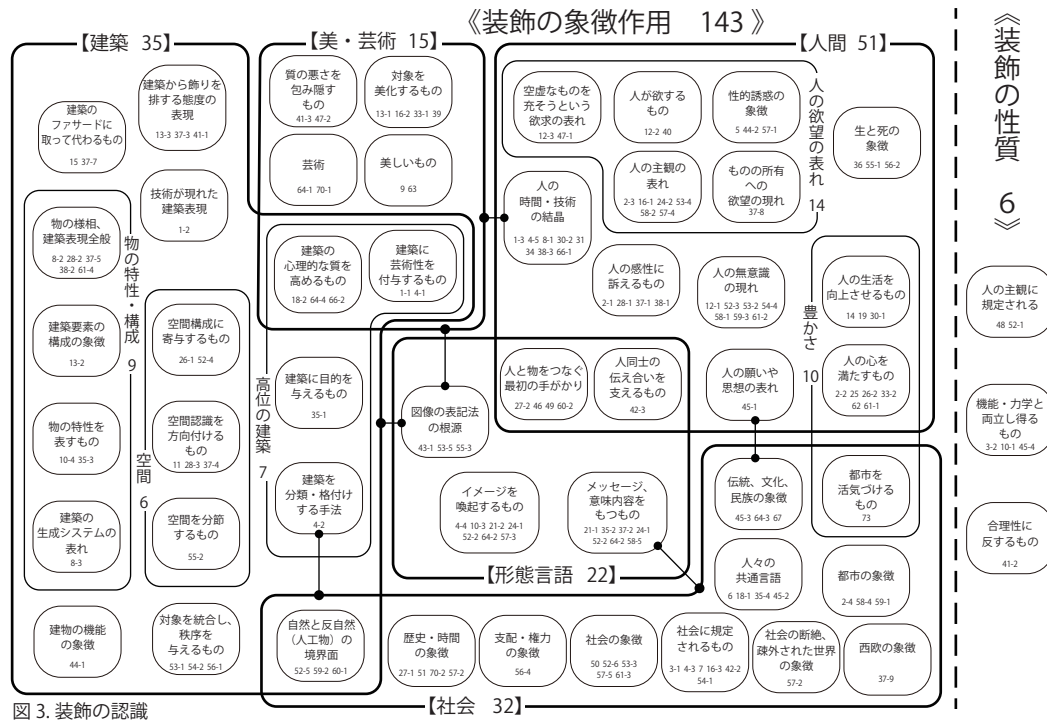


図3. 装飾の認識

| | | | | |
|--|--|--------------------------------------|---|---|
| アドルフ・ロース 【社】未開文明、退廃の象徴 No.1,5,7,29 【性】合理性に反するもの No.4 【人】性的誘惑の象徴 No.5 【社】歴史の象徴 No.12 【人】人の欲望の表れ No.2,12,13 【人】主観的な衝動の表れ No.10 | ル・コルビュジェ 【芸】質の悪さを包み隠すもの No.29 【建】飾りを排する態度の表現 No.41 | アロイス・リーゲル 【建】空間恐怖の表れ No.12,37 | ジョン・ラスキン 【人】人の時間・技術の結晶 No.1,4,49,66 | ゴッドフリート・ゼンバー 【建】建築に目的を与える (高位の建築の象徴) No.35 【語】メッセージ・意味内容を持つもの No.35 【建】物の特性を表すもの No.35 |
| チェーザレ・ロンブローゾ 【社】未開文明の象徴 No.5 【人】性的誘惑の象徴 No.5 | ハインリヒ・ヒュブシュ 【芸】質の悪さを包み隠すもの No.35 | ポール・ヴァレリー 【建】空間恐怖の表れ No.4 | アントニオ・ガウディ 【社】社会の象徴 No.50 | ロラン・バルト メッセージ・意味内容を持つもの No.21 |
| エドガー・カウフマン 【建】空間の認識を方向付ける No.28 | クリストファー・ドレッサー 【人】人の心を惹きつける No.1 | ハンス・ゼードルマイヤー 【社】自律的に存在しない芸術 No.28 | エドウィン・レヒネル 【社】伝統、文化、民族の象徴 No.67 | ピエール・ルグラン 人ともを繋げる最初の手がかり【人・語】 No.46 |
| エドガー・カウフマン 【建】空間の認識を方向付ける No.28 | フランクロイド・ライト 【人】人の心を満たすもの No.15 | 社会の象徴 No.50, 52-6, 53-3, 57-5, 61-3 | 社会に規定されるもの No.3-1, 4-3, 7, 16-3, 42-2, 54-1 | |

図4. 過去の建築家による装飾論の参照

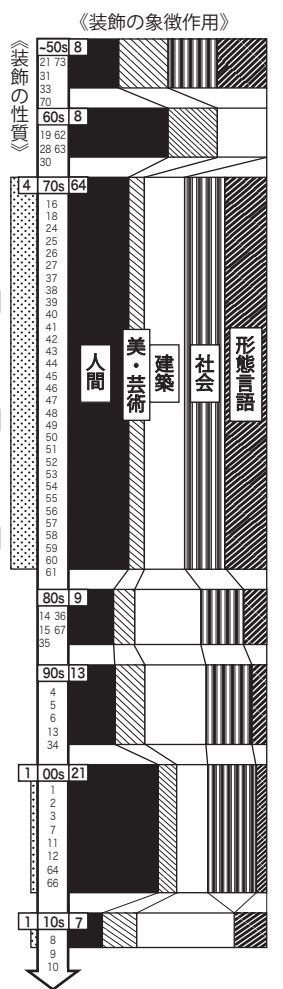


図5. 装飾の認識の通時的傾向

の象徴として捉えるものがみられた。

【建築】は、装飾を建築の持つ機能や構成、物性の象徴として認識するもので、「空間の認識を方向付ける」といった空間に関わる認識がまとまりとしてみられたほか、装飾するという行為を建築表現全般に広げて思考する「物の様相・建築表現全般」や、「建築の生成システムの現れ」といった建築の根底を象徴するものとして捉えるものがみられた。また、「自然の人工物への転写」は、身の周りの自然を建築に写し取る行為を含めて自然の象徴としての装飾を捉えているため、【社会】にも位置付けくものである。[高位の建築]は前述の【美・芸術】にも位置付けており、その中でも「建築を分類・格付けする手法」は、評価が共有される社会が想定されているため【社会】とも関連を持つ。このことから、建築の価値が芸術から社会まで様々な文脈の内に捉えられていることが、装飾のもつ象徴性と関係していることが窺える。

【形態言語】は装飾の象徴作用という言葉に近い働きそれ自体を認識するもので、[人と物をつなぐ最初の手がかり]や[図像の表記法の根源]の様に、装飾を人の表現活動の根源と捉えるものがみられた。

ここで装飾の認識の内容を概観すると、【形態言語】は他の4つのまとまりと関連を持ち、中心に位置付くことから、装飾は【形態言語】を起点として他の文脈との関係から様々な象徴性を形成するものとして認識されているといえる。

3-2. 過去の建築家による装飾論の参照 資料とした論説には、過去の建築家の装飾に対する認識を参照して自身の論を補強するものがみられた。そこでこれらを過去の装飾論として抽出し、図4にまとめた。【人間】における[人の欲望の表れ]はA・ロースやA・リーグル、P・ヴァレリーの思想からの影響がみられ、「人の時間・技術の結晶」はJ・ラスキンの思想との関連がみられた。【形態言語】は、G・ゼンパーやR・バルトからの影響が窺える。全体の傾向をみると、参照された過去の建築家による装飾論は【人間】【社会】が多くみられ、特に人間精神や社会と装飾との関係を述べた論が現代の装飾の認識に大きく影響を与えていると考えられる。

3-3. 装飾の認識の通時的傾向 次に、年代ごとの装飾の認識の内訳を検討した(図5)。50年代には【建築】がみられないのに対し、60年代では【人間】の増加とともに【建築】が現れ、一方【社会】や【形態言語】はみられない。このことは、モダニズム建築において人

間性が軽視されたことに対する問題意識が表出したことや、R・ヴェンチューリの「建築の多様性と対立性」やL・コルビュジェの「今日の装飾芸術」の邦訳本が発行され、ポストモダニズムに関する議論の基礎が生まれたこととの関連を示していると考えられる。ポストモダニズムの議論が活発になされた70年代には認識の数は激増し、60年代には見られなかった【社会】や【形態言語】が再び論じられるようになった。しかし、80年代には認識の数は減少し、ポストモダニズムにおける議論の収束とともに装飾に関する議論も減少したことが窺われる。70年代以降【社会】は安定してみられていたが、2010年代になると一切みられなくなり、【建築】が過半数を占めるようになった。このことから、近年においては建築の社会性や人間性の回復といった主題ではなく、建築の表現形式を思考する上で装飾が題材となっていると考えられる。

4. 装飾の認識と指示対象との関係 2章で分類した指示対象について、論説内の装飾の認識との対応を検討し、3章で捉えた認識のまとまりごとに図6に示した。

まず、【建築】では〈文〉における[建築要素]が多くみられた。それらには「イスラミックなパターンの天井」や「壁面のモザイク」のように近代以前から存在していた要素がみられることを踏まえると、壁画や天井画といった宗教建築にみられる装飾が建築における象徴性の典型として認識されることを示していると考えられる。

次に、【人間】、【形態言語】の内訳をみると、共に〈文〉における[要素なし]が最も多くみられた。ここから、特に模様を施すという操作は、人間精神や装飾の持つ言語的な象徴作用が投影されたものとして認識されていると考えられる。さらに、その〈文〉の内訳をみると[アカンサス文様][とうてつ文]などの様式化した典型的な文様に加えて、[螺旋状の図柄]や[幾何学模様]といった原始的な文様が確認されたことを踏まえると、原始的な社会から現代に至るまで人間が装飾文様を介して形成される象徴性と絶えず関わりあってきたという、人間文化の基幹を支えるものとしての装飾の重要な役割が浮かび上がっていると考えられる。

また、【美・芸術】をみると〈機失〉と〈文〉における[建築要素]が同程度みられたが、図2における〈機失〉と〈文〉の該当数を踏まえると、〈機失〉が相対的に多くみられた。ここからは、建築装飾の一つの典型として見出された模様が芸術性とも接続されていることに加え、「ど

こにも接続しない階段」のように、本来想定される機能と乖離した表現としての装飾は、芸術性を象徴する典型として捉えられていることを読み取ることができる。

一方、【社会】では〈文〉の[建築要素]及び[対象なし]、〈彫〉の[建築要素]、〈なし〉の[付加要素]が同数程度みられ、人間社会を象徴するものとして様々な装飾的操作とその対象が想定されていることが窺える。特に、「博物標本」や「チャーミングなフィギュア」といったユニークな付加要素が〈なし〉にみられ、それに対応する認識にはその土地が持つ文化や地域性の象徴を捉えるものなどがみられた。このことから、文化や民族、地域性などと結びつくことで付加要素までもが装飾として用いられ、社会と関係を持った様々な建築要素・および付加要素が建築を彩ってきたことが窺われる。

また、装飾の性質についての認識では、「金属に穴を穿つパターン」という現代技術がもたらす新たな装飾的操作と共に、情報技術の発展により建築物の装飾的な形態と機能的な合理性が並行して検討可能になった現代の状況について言及するものがみられた。これらは、現代技術が可能とする新しい建築表現について、装飾という題材を元に思考する建築家の試みであると考えられる。

5. 結 以上、建築家の言説を対象に装飾の指示対象を分類し、建築家の思考が投影された装飾の認識を相互に比較検討して得られたまとまりと併せて、それらの対応関係を検討した。その結果、装飾的操作と構成要素の分類から、操作自体が装飾として自立する世間的了解を持った装飾と、建築要素と一体となって認識される装飾、存在自体が装飾とみなされ得る付加物という大きな傾向を見出した。また、装飾は象徴作用を有する言語に近い働きを持っており、人間/社会/美・芸術/建築といった様々な文脈との関係から象徴性を形成するものとして認識されるという、装飾の認識の体系を見出した。さらに、これら認識の体系と指示対象の対応関係から、装飾が原始的な社会から絶えず人間と共にあり、宗教や民族文化、芸術、技術発展などなど様々な文脈と結びついて意味を形成してきたことを明らかにした。このことから、装飾とは人間の根源的な表現活動であり、個人から社会、芸術、物質といった幅広い分野での思考を要する建築行為の根幹を支える、建築的主题の一つであると考えられる。

- 註1) ここでいう建築家とは、主に建築や美術についての表現活動をしている、国内外の建築意匠家や建築歴史家、建築評論家をさす。
 2) ここでは、国内の論説を取り扱う建築誌「新建築」「建築文化」[SD]「10+1」「10+1website」「建築雑誌」「住宅建築」の中から「装飾」という言葉が題目に含まれる全73資料を対象に分析を行った。
 3) 川喜田二郎「発想法」(中央公論社)内のKJ法をもとに分析した。

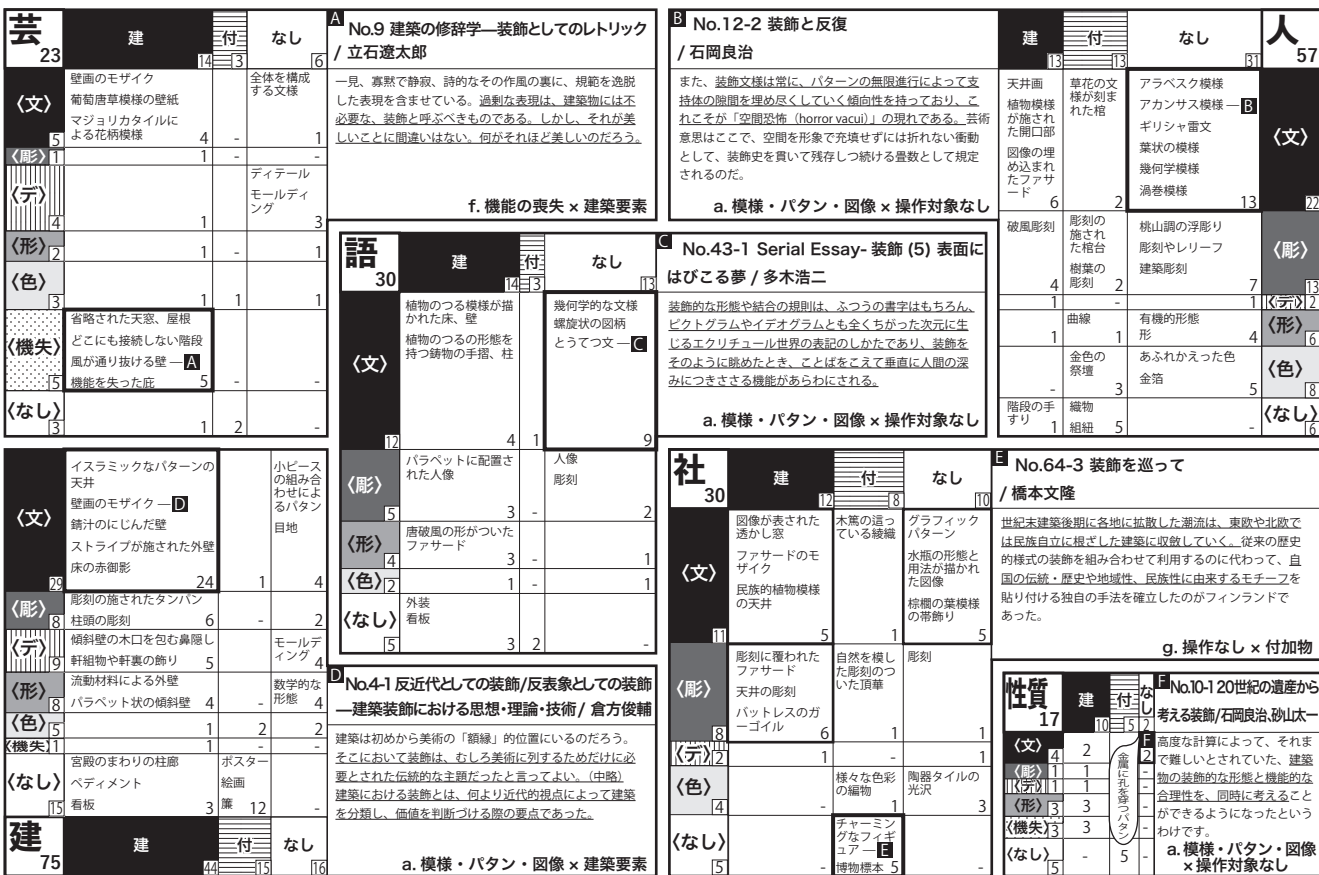


図 6. 装飾の認識と指示対象の関係